

きらめき人

頼まれたら、どうしても断れないんだよなあ

阿部勝衛さんは、20代後半まで漁船員だったのだが、母親から「家業（民宿）と一緒にやってくれ」と頼まれた。魚を捌くのは得意だったし、人当たりも良いので、民宿・大北荘は評判になった。

息子が小学校を終えるころ、中学校に不満を持つ生徒と出会い、相談に乗った。教師からも信頼されてPTA副会長に推されたよと懐かしそうに話す。

その取り組みが評価されたのか、当時の歌津町長から「保護司になってくれないか」と打診された。

自分ができるわけがないと断ったのだが、先輩の保護司からも強く勧められ、引き受ける事にした。

任命されてから25年以上経ち、15人ほどの若者の面倒を見てきた。昨春秋、永年の地道な活動により「藍綬褒章」を受賞した。現在も登米・南三陸地区保護司会の理事として活動中だ。

一方、知人から「グループホームの立ち上げを手伝ってほしい」と懇願され、平成11年にはその法人の理事長に就任した。「地域住民がとても協力的だったので感謝している」と振り返る。

さらには、居宅介護支援を行っている事業所からも理事就任を依頼された。「事務局や職員が一生懸命に仕事しているから応援したくなるのさ。頼まれたら嫌とは言えないんだよなあ」。その笑顔に人望の厚さを感じるが、不断の努力も垣間見える。

KATSUEI ABE



60歳を過ぎた年金手続の際に、戸籍上は衛(旧字体)と登録されていたと知った。母親からは「社会に役立つ人間になって欲しいとの思いから、衛(新字体)を使っていた」と明かされたと言う。

阿部勝衛さん(歌番所)



野球部に所属しながら、生徒会でも副会長として学校を盛り上げた。「よいと思うことをしっかり発言できる大人になりたい」と意気込む後藤健心さん。

KENSHIN GOTO

新たな門出の時期となる3月。志津川高校3年の後藤健心さんもその1人だ。「学年みんな仲が良いんです。卒業する寂しさもあるけれど、またすぐに会えるんじゃないかなって気もしています」卒業を目前に控えた2月、後藤さんはサンオーレそでは海水浴場のビーチクリーンを企画していた。「友だちとの思い出作りと、町への恩返しの意味を込めて綺麗にしようか、と話していて企画が生まれました」と話す後藤さん。

「夏は部活帰りに練習着のままみんなで海に行つて遊んだり、真冬の雪が降り積もるなか遊びに行つた思い出もある。何かあれば海に行っていた。やっぱり海は町のシンボルだと思っんですよな」

震災後は、ボランティアで来ていた町外の人ともたくさん出会ったり、高校では台湾の学生との交流や、長期実習に来ていた大学生とも交流があり、親交を深めた。「田舎なのにいろんな人に出会える不思議な町」と南三陸町のことを話す後藤さん。卒業後は、小さい時から夢であった子どもと関わる仕事を指して、古川にある短期大学へと進学する。この春で町を離れることになるが、「もし出来ることなら南三陸に戻って仕事をした。よい町だと思いますから」と話す。そんな若手の声に希望の光が見える気がする。

後藤健心さん(志沼田)

海がシンボルの町にいつか戻ってきたい。

ひとめぐり